

動詞移動は便宜的で姑息な手段？

—— Xバー理論批判論争を通して生成文法の方法論を再検討する ——

中 井 悟

I Xバー理論批判論争とは

『月刊言語』1994年3月号は、「〈入門 Xバー理論〉」という特集を組み、生成文法のXバー理論を紹介した。¹ その特集に触発され、多分、以前から生成文法に批判的であったと思われる小泉保氏が、² 同じ『月刊言語』1994年7月号に「〈Xバー理論〉批判」という論文を寄せられた。そして、その批判に対する反論を、特集の執筆者の一人である中島平三氏が書かれ、こうして、『月刊言語』1994年7月号・9月号・11月号・12月号において、小泉氏と中島氏の間でXバー理論批判論争が行われることになったのである。論争は、

小泉氏の「〈Xバー理論〉批判」(7月号)

中島氏の「「〈Xバー理論〉批判」に答える」(9月号)

小泉氏の「Xバー理論と格理論の欠陥—中島氏の反論に答える」(11月号)

中島氏の「Xバー理論再批判へのお答え」(12月号)

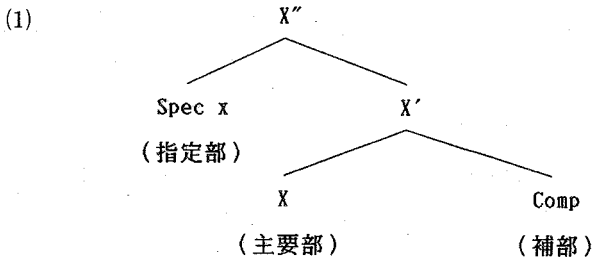
と4回にわたって行われた。

論争は、非生成文法学者(小泉氏)が生成文法を批判し、生成文法学者(中島氏)が反論するという形で行われているが、非生成文法と生成文法の文法というものに対する考え方の違いがこの論争に典型的に見られる。そこで、その違いを取り上げて論じ、生成文法の基本的な考え方を明確にしたいというのが本稿の目的である。

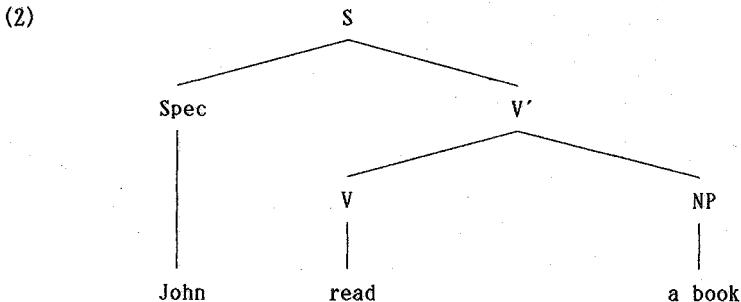
II 小泉保氏の X バー理論批判

まず、7月号に掲載された小泉氏の「〈X バー理論〉批判」の内容を紹介する。

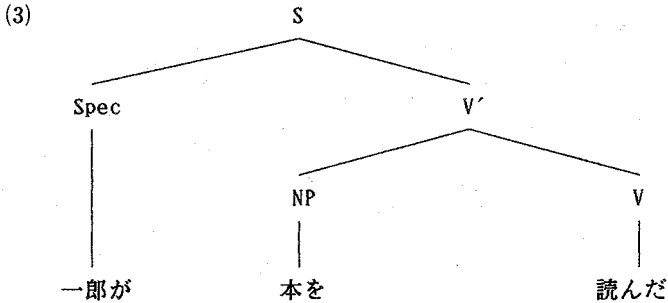
X バー理論は SVO と SOV の語順はうまく生成できるが、VSO の語順を生成するためには、「便宜的で姑息な手段」(7月号, p. 90) を使わねばならないというのが小泉氏の批判である。X バー理論では、文は次のような構造をしている。³



今、X を V とすると(1)は、(2)にみられるような、SVO 型の言語 (例えば、英語) の文を生成するし、⁴



(2)で主要部 V と補部 NP を入れ替えれば、(3)のような、「一郎が本を読んだ」という日本語文を導き出せる。



ところが、Xバー理論では、

(4) $X' \rightarrow X \text{ Comp}$

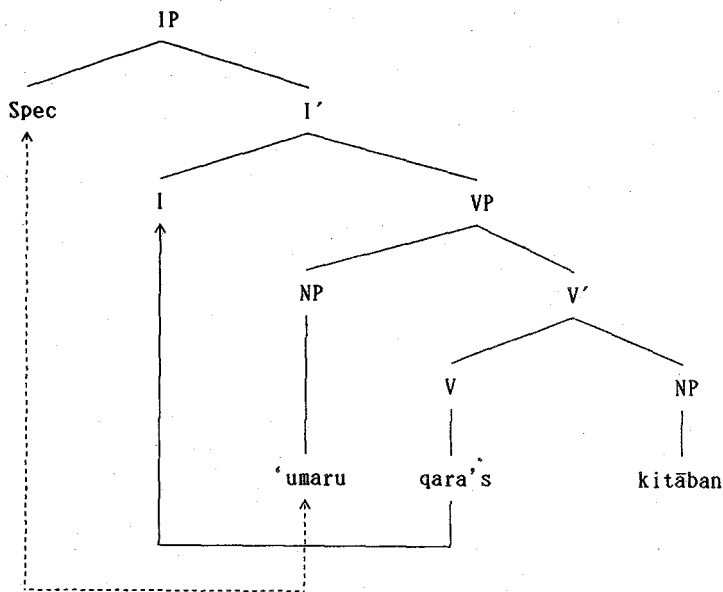
と規定されており、動詞と目的語が動詞句として隣接していることになっている。これでは、動詞と目的語の間に主語がくるVSOの語順を生成することができない。VSOの言語として、小泉氏は、アラビア語から例を引いている。

(5) qara'a 'umaru kitaban.

読んだ オマルが 本を

そこで小泉氏は、保坂泰人の「〈言語類型論〉再考」⁵で採用されている動詞移動を紹介している。(6)の図に見られるように、まず、SVOの語順で文を生成する。アラビア語では、動詞と主語の間に数・性・人称という文法カテゴリーの一致が要求され、この種の一致はIPのSpecとVの間でなされるので、順序としては、主語の'umaruをいったんIPのSpecへ移動し、動詞qara'aと文法的一致をさせてから、また元のNPの位置へ逆戻りさせ、それから動詞qara'aをIの位置へ移動させる。

(6)

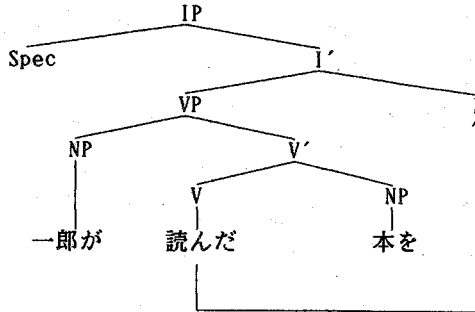


小泉氏によれば、「このように名詞を上下させたり、動詞を上昇させたりする操作は、実に便宜的で姑息な手段」(7月号, p. 90)である。

さらに、問題にすべき小泉氏の表現を抜きだしてみよう。

- (7) 動詞は文の中核である。だから、まず構造の中で指定された位置に生成させるべき要素である。したがって、動詞を都合よく移動させるのは望ましいことではない。もし保坂の言うように、SVOタイプからVSOタイプが導きだせるというならば、似たような手順で日本語のSOV型も派生できよう。すなわち、I'の下にくる補部と主要部VPの位置を予め入れ替えておけば、SVOから出てきた動詞「読んだ」を文末Iの位置に移せばよいことになる。これに対し、日本語の研究者はどのように受けとめるであろうか。(7月号, p.

90)



- (8) とにかく、動詞を安易に移動させることは慎まなければならない。動詞の移動を認めれば、VSO, SVO, SOV という動詞の位置による言語類型自体意味がなくなる。(7月号, p. 90)
- (9) とにかく、アラビア語のような VSO 型言語にのみ動詞移動を用いるというように、ある言語のみ特別扱いをしてはならない。特別扱いをすることは普遍性の欠けている証拠である。(7月号, p. 91)

小泉氏は、動詞と目的語の文法的カテゴリーの一致でも、Xバー理論では、目的語を上下させたりしなければならず、特別扱いしなければならぬとして、「普遍的言語理論はすべての言語に適用できなくてはならない。」(7月号, p. 93) と強調している。

Ⅲ 中島平三氏の反論

小泉氏の「〈Xバー理論〉批判」に対して、9月号で、中島平三氏が「『〈Xバー理論〉批判』に答える」という反論を書いておられる。ここでは、動詞移動に関する反論だけを紹介しておく。中島氏は、「V移動は姑息な手段ではない」と題して、次のように説明しておられる。中島氏の説明をそのまま引用しよう。(9月号, pp. 94-95)

最近の VSO 型言語の扱いとして、本誌 [『月刊言語』] 三月号の保坂論文で触れられているように、基底語順の VO (S は VP の指定部にあ

る) から V を I の所へ繰り上げるといふ派生過程が広く採られている。この派生過程は保坂氏独自のものではない。

この派生で用いられている本動詞の繰り上げ (以降, V 移動) は, VSO の派生とは独立して, 多くの言語で様々な現象を扱うのに用いられている操作であり, 決して「便宜的で姑息な」手段ではない。例えば, ゲルマン語に見られる定動詞二位 (いわゆる定動詞倒置) は, 本動詞の V 移動によるものである。

- (2) a *Ich weiß nichts davon.* (定動詞正置)
 b *Davon weiß ich nichts.* (定動詞倒置)

またフランス語における, 次例の不定詞節 (a) と定形節 (b) との間の語順 (本動詞に対する副詞や否定辞の語順) の相違も, 定形節では本動詞が V 移動により I の所へ移動するためであると考えられる。

- (3) a *Souvent paraître triste pendant son voyage de noce,*
 to often look sad during one's honeymoon
 c'est rare.
 that is rare
 b *Jean embrasse souvent Marie.*
 John kisses often Mary
- (4) a *Ne pas regarder la télévision consolide*
 not to watch television strengthens
 l'esprit critique.
 one's independence
 b *Jean (n') aime pas Marie.*
 John likes not Mary

小泉氏は, V 移動を認めるならば日本語に関しても, (5)のような直感に合わない基底構造から SOV の語順を派生できることになってしまう, と論じている。

(5) [IP [I' [VP S [V' V O] I]] → SOV

だが、V の補部 O をその右側に置くならば、パラミターの値の選択からして、I の補部である VP もその右側に生じるはずである。Xバー理論では、同理論が便宜主義であるという印象を与えようとして作為的に作られた(5)のような奇妙な派生過程についても、正しく排除することができる。

IV コメント(1)

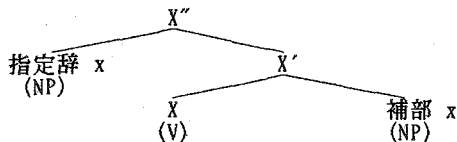
SVO の語順から動詞移動によってアラビア語のような VSO の語順を派生できるのなら、SVO から日本語のような SOV の語順も派生できることになるというのは、小泉氏の生成文法の理解不足からくる誤りである。生成文法は原理 (principle) とパラミター (parameter) から成る演繹体系であるが、小泉氏は、その演繹体系全体を理解せずに、その一部だけを取り上げて批判されているのである。上の引用の最後で中島氏もそのことにふれておられるのであるが、説明不足であるので、もう少し詳しく説明する。

小泉氏は、11月号で、中島氏の反論に対する答えとして、「Xバー理論の欠陥」と題して、再度、次のような議論を展開されている。(11月号, pp. 92-93)

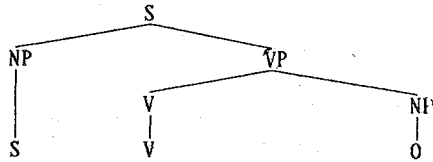
Xバー理論は文の根幹をなす文法構造を生み出す規則である。Xバー理論によって、どのようなタイプの文構造ができるか検討してみよう。

いま、Xバー理論の原型(1)における X を動詞とし、指定辞と補部を名詞句とすれば、そのまま(a)のような SVO 型の文構造ができ上がる。

(1)



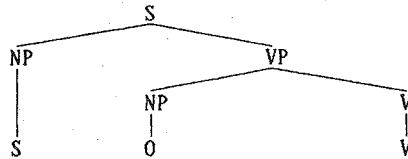
(a)



ここで、指定辞と X' もしくは X と補部との入れ替えを認めることにしよう。

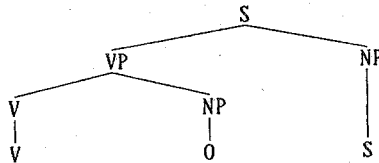
〈補正 1〉 X と補部を交換させると、(b) のような SOV 型の文構造が成立する。

(b)



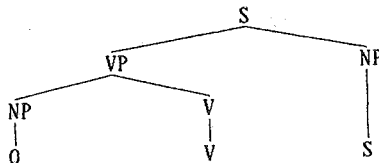
〈補正 2〉 指定辞と X' を入れ替えると、(c) のような VOS 型の文構造が導き出される。

(c)



〈補正 3〉 指定辞と X' を交換してから、さらに X と補部を入れ替えると OVS という配列が出現する。

(d)



(中略)

すなわち、X バー理論を補正することにより、

SVO, SOV, VOS, OVS

という四文型を作り出すことはできても、アラビア語のような VSO 型言語を生成することはできない。したがって、X バー理論は普遍性を欠くことになる。

しかし、生成文法では、小泉氏のいう(1)のような構造が原型であるとは考えられていない。例えば、ある生成文法の入門書で紹介されている X バー理論の式型は次のようになっている。⁶

(10) $VP \rightarrow \text{Spec}; V'$

$V' \rightarrow V'; XP$

$V' \rightarrow V; XP$

セミコロンは、セミコロンで分けられている二つの要素の順序は決められていないということを表している。従って、

(11) $V' \rightarrow V; XP$

は、

(12) $V' \rightarrow V XP$

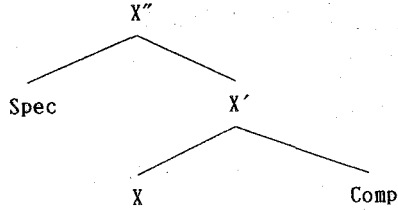
をも、

(13) $V' \rightarrow XP V$

をも意味する。

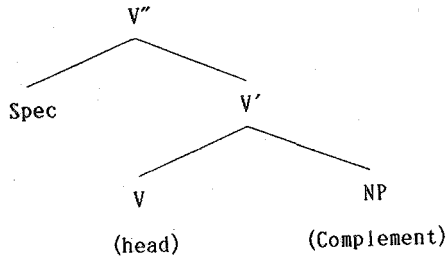
では、この二つの要素の順序を決定するのは何かと言えば、それはその言語が head (主要部) の位置に関するパラミターの値を、head-initial とするか、head-final とするかということである。英語は、動詞—目的語 (名詞句)、前置詞—目的語 (名詞句) という語順が示すように、head-initial とパラミターを設定する。従って、英語の句の構造は、(14) のようになる。

(14)



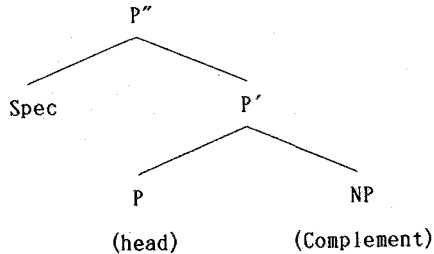
当然、英語の動詞句の構造は(15)のようになり、

(15)



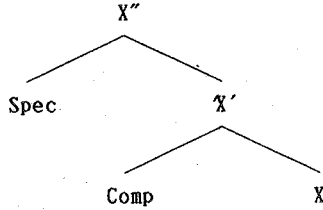
英語の前置詞句の構造は(16)のようになる。

(16)



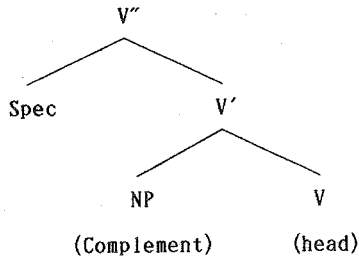
英語とは逆に、日本語は head-final となるようにパラミターを設定する。つまり、日本語では、動詞句は目的語（名詞句）—動詞という語順であり、後置詞句も、目的語（名詞句）—後置詞という語順である。（英語で前置詞が前置詞句の head であるように、日本語では後置詞が後置詞句の head である。）従って、日本語の句の構造は、(17)のようになる。

(17)



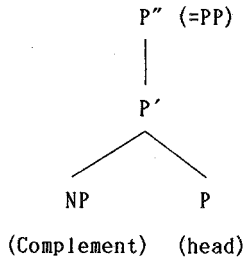
当然、日本語の動詞句の構造は、(18)のようになり、

(18)



日本語の後置詞句の構造は、(19)のようになる。⁷

(19)

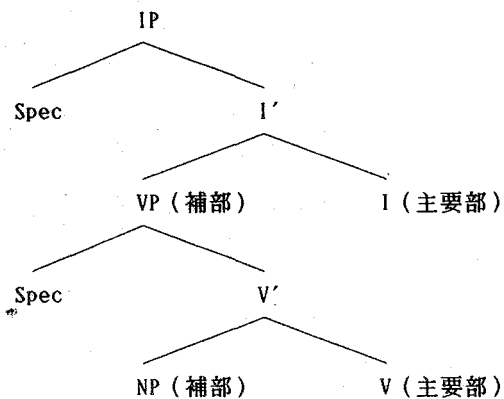


日本語の SOV という語順は、決して小泉氏の(1)のような原型から補部と主要部を入れ替えて派生したのではない。日本語は主要部の位置に関するパラミターの値が head-final と設定されるので、最初から SOV の語順なのである。

また、日本語は head-final とパラミターを設定するので、IP の構造は、

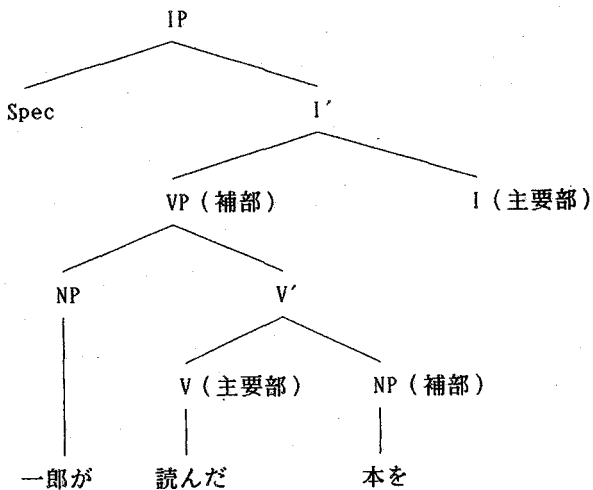
(20)のようになり、

(20)



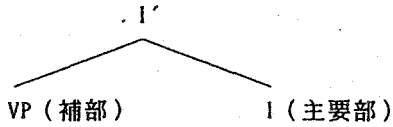
小泉氏が設定するような、(21)のような構造にはなり得ない。

(21)



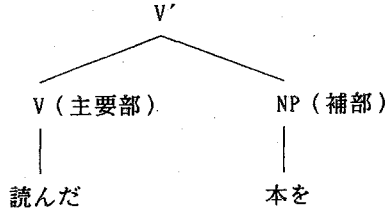
(21)の構造では、I' の部分は、

(22)



と head-final になっているが、 V' の部分では、

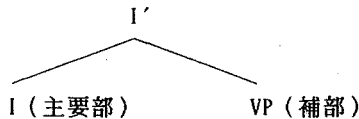
(23)



と、head-initial となっている。日本語は head-final となるようにパラミターを設定するのであるから、どの部分でも補部—主要部という語順になっていなければならないのである。

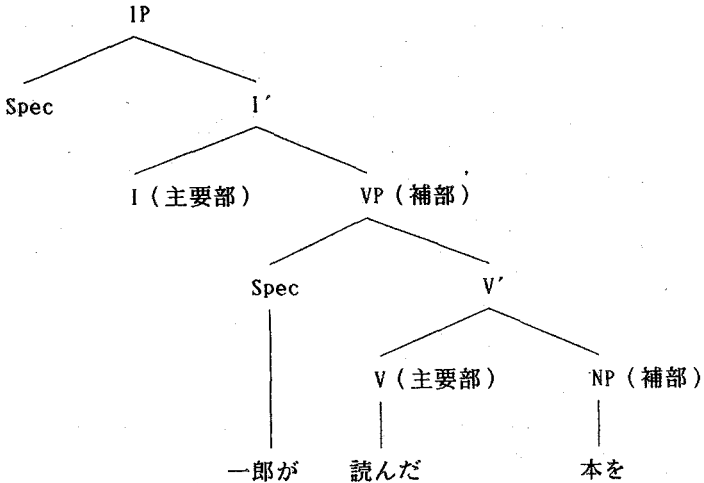
もし、(23)のようにするのならば、これは head-initial ということであるから、 I' の部分も、

(24)



と、head-initial になるようにしなければならない。つまり、英語と同じ、(25)のような構造にしなければならない。

(25)



中島氏が、「だが、Vの補部Oをその右側に置かならば、パラ미터の値の選択からして、Iの補部であるVPもその右側に生じるはずである。Xバー理論では、同理論が便宜主義であるという印象を与えようとして作為的に作られた(5)のような奇妙な派生過程についても、正しく排除することができる。」(9月号, p. 95) といっておられるのは、このことである。

V コメント(2)

小泉氏はアラビア語における動詞移動を「便宜的で姑息な手段」としている。しかし、中島氏は動詞移動は、ドイツ語やフランス語でも必要な規則であり、決して「便宜的で姑息な手段」ではないと反論している。

この動詞移動に関する小泉氏と中島氏の見解の相違は、言語学者が作成する文法とはどのようなものでなければならないかという見解の相違であり、また、文法の普遍性に関する見解の相違でもある。

生成文法学者は一言語の文法を記述する際に常に Universal Grammar (普遍文法)⁸を考慮している。生成文法では、人間は Universal Grammar を生

得的に持っており、この Universal Grammar は原理とパラミターからなっており、パラミターの値の設定の違いで各言語の違いが生じることになると考えられている。例えば、先ほども述べたように、英語では、head-initial となるようにパラミターが設定され、句の構造は(14)のようになり、動詞句の構造は(15)のようになり、前置詞句の構造は(16)のようになる。日本語では、head-final となるようにパラミターが設定され、句の構造は(17)のようになり、動詞句の構造は(18)のようになり、後置詞句の構造は(19)のようになる。

こうしたパラミターの一つに動詞移動パラミターを仮定すると、アラビア語、ドイツ語、フランス語では、この動詞移動パラミターの値が ON (あるいは+) になるということになる。この普遍的なパラミターが ON になることによってアラビア語では SVO の語順から VSO の語順が派生されることになるのであり、決して、「便宜的で姑息な手段」で VSO の語順を派生しているのではない。

このように、生成文法では、普遍的な原理と各種のパラミターを仮定し、そのパラミターの値の設定の違いで個別言語の文法を記述しようとするのである。この点を理解せずに一言語の個別的現象だけを取り上げて批判しても的はずれなものになってしまう。

この点を確認するために、小泉氏自身が支持されている依存文法による三つの語順の派生をみてみよう。

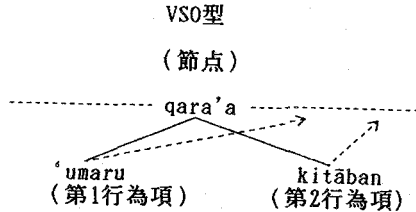
小泉氏は、依存文法では、アラビア語のような VSO 型語順も、容易に説明がつくとされている。小泉氏の説明を引用してみよう。(7月号, p. 91)

こうした矛盾 [X 理論ではアラビア語のような VSO 型言語を生成できないということ、あるいは、VSO の語順を生成するためには動詞を移動させるという「便宜的で姑息な手段」を使わなければならないということ] も L. テニエルの依存文法をもってすれば、三つの語順タイプも容易に説明がつく。依存文法では、動詞が文の中核で、名詞はこ

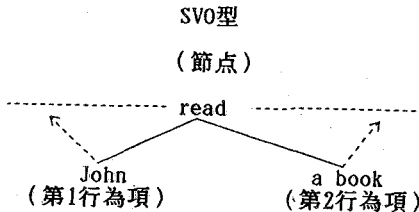
れに支配されている。逆に言えば、名詞は動詞に「依存している」ことになる。そこで、動詞が節点となり、名詞は節点の下に位置づけられる。そして、主語となる名詞を第1行為項、目的語になる名詞を第2行為項と名付けている。したがって、三つの言語タイプは次の(h)(i)(j)のような構造をもつとされる。

節点を横切る水平の点線は「話線」と呼ばれ、発話で実現される語順と考えていただきたい。語順については、言語特有の方式がある。

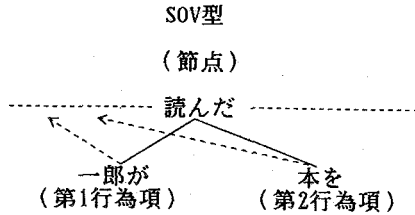
- (h) VSO 型のアラビア語では、二つの行為項が節点の右側へと上げられる。



- (i) SVO 型の英語では、第1行為項が節点の左側へ、第2行為項は節点の右側へ上げられる。



- (j) SOV 型の日本語では、二つの行為項が節点の左側へと上げられる。



このように、依存文法によれば、三つの言語類型はいずれも同一の構造をもっているが、行為項の引き上げの仕方に相違があることになる。

とにかく、アラビア語のような VSO 型言語にのみ動詞移動を用いるというように、ある言語のみ特別扱いをしてはならない。特別扱いをすることは普遍性の欠けている証拠である。

この説明からわかるように、依存文法では、表層のレベルと抽象的なレベルの二つを区別している。抽象的レベルでは、どの言語も定まった語順はなく、動詞と動詞に依存している名詞が存在しているだけである。⁹ 表層の語順は、名詞を動詞の前後に引き上げる一種の変形によって派生される。

しかし、この二つのレベルを区別し、名詞を引き上げる方法は、表層のレベルしか認めない文法からみれば、「便宜的で姑息な手段」ということになるだろう。

この批判に対して、依存文法は、こうした仮定をすることによって、世界中の言語の語順を「ある言語のみ特別扱い」しないで派生できるのだと答えるであろう。「ある言語のみを特別扱いをしてはならない」とする依存文法の枠組みでは、この派生が最善なのである。つまり、依存文法の理論全体を理解しないで、個別の名詞の引き上げのみを取り上げて批判してはならないのである。¹⁰

ある文法理論を批判する時には、個別の現象を取り上げて批判してはならず、その文法の理論全体を考慮しなければならないことが、この依存文法の例からも理解できるであろう。

VI コメント(3)

しかし、ある規則（例えば、動詞移動）が、他の言語で正当化されているから別の言語でも使用してもよいという、生成文法のこの考え方には問題があるように思われる。一つの例として、Haegeman が Rizzi の Relativized Minimality を紹介しながら展開している complementizer の agreement の問題を取り上げよう。¹¹（番号は Haegeman のもの。）

Rizzi は、Empty Category Principle を次のように規定する。

35 ECP

A non-pronominal empty category must be

35a properly head-governed; (Formal licensing)

35b theta-governed or antecedent-governed; (Identification)

where

35c proper head-government is government by X^0 within the immediate X' ;

35d theta-government is government by a theta assigner;

35e antecedent-government is government by an antecedent, an element that governs the governee and binds it;

35f X binds Y if and only if X c-commands Y and X and Y are coindexed; (Rizzi, 1990a: 74)¹²

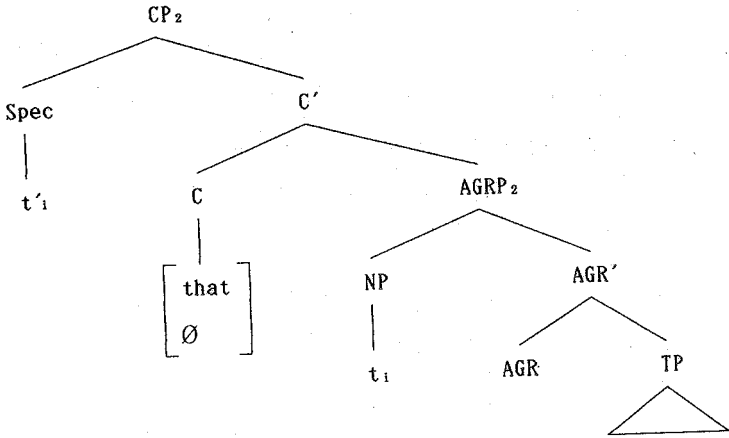
次に、埋め込み文の主語を取り出した文を二つ比較する。

38a * $[_{CP1}$ Who did $[_{AGR P1}$ you think $[_{CP2}$ t'_i that $[_{AGR P2}$ t_i left]]]]?

38b $[_{CP1}$ Who did $[_{AGR P1}$ you think $[_{CP2}$ t'_i \emptyset $[_{AGR P2}$ t_i left]]]]?

この二つの文は次のような構造をしている。

38c



問題は38bの文である。この文は文法的であるから、35のECPを満たしているはずである。つまり、

t_i は適正に head-govern されている

t_i は antecedent-govern されている

ということである。ところが、38cの図を見るかぎり、 t_i は適正に head-govern されていない。AGRがheadなのであるが、AGRはimmediate domainのAGR'内で t_i をgovernしていないのである。(35c参照。)

そこで、Haegemanによると、Rizziは、次のような提案をする。

Rizzi (1990a) proposes that in English a tensed complementizer can be realized either as *that*, which is inert for government, or as AGR, which belongs to the class of governors. (p. 652)

39 C → $\left\{ \begin{array}{l} \textit{that} \\ \textit{AGR} \end{array} \right\}$

この AGR は次のような特徴を持つ。

AGR can be an independent head with its own autonomous inflectional projection (AGRP). According to (39) AGR can also be associated with another head as a feature or a set of features (cf. Rizzi, 1990a: 52). The licensing condition on AGR is that it must be coindexed with its specifier. (p. 652)

そうすると、(38b) で、AGR は C^0 と結び付け (associate) られる。 C^0 がある AGR は、その指定部と coindex される。すると、(38b) の文は次のように表示されることになる。

38d $[_{CP1} \text{Who}_i \text{ do } [_{AGRP1} \text{you think } [_{CP2} t'_i \text{ AGR}_i [_{AGRP2} t_i \text{ AGR left}]]]]?$

これを見ると、主語の t_i は ECP を満たしていることがわかる。つまり、

t_i は C^0 と結び付けられた AGR によって適切に head-govern されている

t_i は CP_2 の指定部にある t'_i によって antecedent-govern されている

さて、理論的に問題になるのは、AGR と C の結び付けである。小泉氏に言わせれば、これも「便宜的で姑息な手段」ということになる。もちろん、Rizzi なり Haegeman にはこのような仮定をする根拠があるはずである。Haegeman は complementizer が agreement の対象になる根拠として、West Flemish の例をあげている。

Haegeman によれば、次の例で、da という complementizer は 3 人称・単数形であり、dan という complementizer は 3 人称・複数形である。

40a da den inspekteur da boek gelezen eet.
that the inspector that book read has

'that the inspector has read that book'.

- 40b dan d'inspekteurs da boek gelezen een.
 that the inspectors that book read have
 'that the inspectors have read that book'.

West Flemish では、complementizer は、動詞と同じように、人称と数によって語形変化するのである。次の例では、complementizer の da が、動詞の goa と同じように、人称と数によって語形変化している。

41 *C-agreement in West Flemish*

(i) (ii)

- | | | |
|-----|-----------------------------|------------------------------|
| 41a | dan-k ik noa Gent goan | Tun goan-k ik noa Gent. |
| | that-I I to Ghent go | then go-I I to Ghent |
| | 'that I am going to Ghent' | 'Then I am going to Ghent.' |
| 41b | da-j gie noa Gent goat | Tun goa-j gie noa Gent. |
| | that-you you to Ghent go | Then go-you [you] to Ghent |
| 41c | da-se zie noa Gent goat | Tun goa-se zie noa Gent. |
| | that-she she to Ghent goes | then goes-she she to Ghent |
| 41d | da-me wunder noa Gent goan | Tun goan-me wunder noa Gent. |
| | that-we we to Ghent go | Then go-we we to Ghent |
| 41e | da-j gunder noa Gent goat | Tun goa-j gunder noa Gent. |
| | that-you you to Ghent go | then go-you you to Ghent |
| 41f | dan-ze zunder noa Gent goan | Tun goan-ze zunder noa Gent. |
| | that-they they to Ghent go | then go-they they to Ghent |

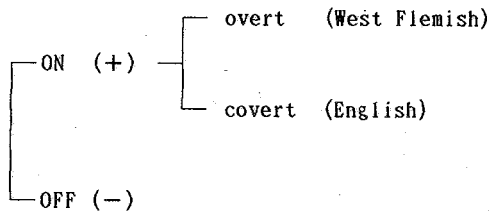
Haegeman は次のようにまとめている。

To summarize this section: we assume that the formal licensing of traces is achieved by head-government. The problematic case of sub-

ject traces can be dealt with adequately once we admit that C can be realized by AGR and that AGR belongs to the class of proper head governors. (p. 654)

そして、このようにまとめられた仮説が正しい証拠として、West Flemish の complementizer の例を出したのである。これは、アラビア語における動詞移動を支持する証拠としてドイツ語とフランス語における動詞移動を出している中島氏の論法と同じであり、これが生成文法学者の採る論法なのである。

パラミターという観点からこの論法をとらえなおしてみると、次のようになる。Universal Grammar に、complementizer の agreement に関するパラミターを仮定してみる。West Flemish では、当然、このパラミターの値は ON (あるいは+) である。英語は、目には見えないが、complementizer が agreement をすると仮定するので、やはり、パラミターの値は ON (あるいは+) である。目に見える形でも目に見えない形でも、agreement を行わない complementizer をもつ言語では、パラミターの値は OFF (あるいは-) である。そうすると、このパラミターの値は、



ということになる。

このような、パラミターが ON ではあるが、covert に行われるという場合を仮定してよいのであろうか。Haegeman の論法を押し進めていけば、ある一つの言語で何か観察されれば、その観察に基づいて新たなパラミターを

設定し、その言語ではそのパラミターの値が ON であり、他の言語では、そのパラミターの値が ON ではあるが、covert に行われていると仮定してよいことになる。これではあまりにも都合がよすぎるのではないだろうか。

もちろん、ある規則が covert であるからいけないということはない。ある規則を仮定するのは、文法全体との整合性、文法全体の簡潔性、予測能力などの観点から評価するものである。ただ見えないからという理由で排除するのなら、LF (Logical Form) での移動はすべて目に見えないのであるから、LF の存在自体を否定しなければならなくなる。しかし、生成文法では、LF は必要であるから、仮定しているのである。LF の存在を仮定しなければ、言語現象がうまく説明できなくなるのである。

Ⅶ コメント(4)

11月号で、小泉氏は、言語によっては、主要文型と副次文型が区別され、副次文型は主要文型から派生されると主張されている。例えば、ドイツ語では、単文が SVO 型で、復文の従属節は SOV 型であり、「単文が主要文型で、復文では副次文型が用いられていると考えられる」(11月号, p. 94) ので、副次文型の SOV 型は主要文型の SVO 型から派生させるべきであると主張されている。小泉氏によれば、「副次文型から動詞移動により主要文型を導きだすことは許されない」(11月号, p. 94) のである。そして、次のように、中島氏のアラビア語における動詞移動を批判されている。

アラビア語では、VSO 型の動詞文が普通の形式で主要文型をなしている。これを SVO 型の名詞文に改めることもできるが、これはあくまでも副次文型である。

だから、主要文型 VSO の主語 S を前方移動させて副次文型 SVO を派生させたと説明すべきであって、中島氏 (月刊『言語』九月号九五頁) のように、副次文型 SVO から動詞移動によって、VSO を派生させる

という考え方は本末転倒である。(11月号, p. 94)

しかし、この論法は、小泉氏が生成文法の基本的な考え方を理解されていないことを示すものである。

表面的な観察で、ある型が基本型で、他の型はその基本型から派生されるという考え方は、生成文法では採用しない。どの型を基本型とみなすかは、他の型をその基本型から派生することによって言語学的に有意義な一般化が達成されるかどうか、文法が簡潔になるかどうか、多くの現象がうまく説明できるかどうか、によって決まることである。ドイツ語においても、単文がSVO型であるから、これが基本型であり、他の文型はこのSVO型から派生するというのではなく、SVO型を基本型として他の文型をこのSVOから派生すると文法全体はどのようになるか、また、SOV型を基本型として他の文型をこのSOV型から派生すると文法全体はどのようになるかということを調べ、その上で、両者を比較して、どちらを基本型とすべきかを決定するのである。(あるいは、全く異なった語順から、SVO型とSOV型の両方を派生すべきという分析結果も出てくる可能性もある。)

この生成文法の基本的な考え方を理解されていないので、「動詞は文の中核である。だから、まず構造の中で指定された位置に生成させるべき要素である。したがって、動詞を都合よく移動させるのは望ましいことではない。」(7月号, p. 90)とか、「とにかく、動詞を安易に移動させることは慎まなければならない。動詞の移動を認めれば、VSO, SVO, SOVという動詞の位置による言語類型自体意味がなくなる。」(7月号, p. 90)とかいう発言が出てくるのである。生成文法の観点からすれば、言語類型論がまず存在するのではない。言語学的に有意義な一般化が達成されるかどうか、文法が簡潔になるかどうか、文法の整合性がとれるかどうか、他の文法現象を説明でき、また、予測できるかどうか、といった基準にしたがって動詞を移動させるかどうかを決めるのである。これらの基準にあっていながら、動詞移動

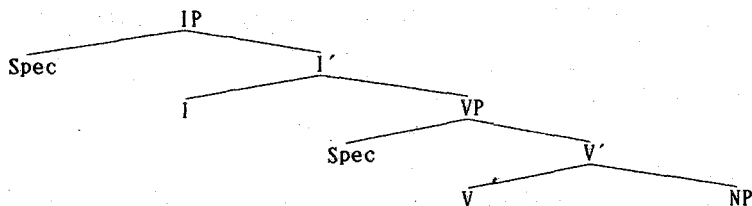
を採用している文法が、小泉氏のいう動詞の位置による言語類型論に合致しなくとも、なんら問題はないはずである。

VIII まとめ

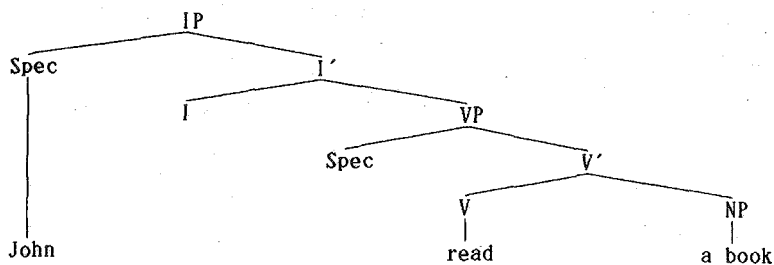
小泉氏と中島氏の間で行われたXバー理論批判論争は、異なった理論的枠組みでなされた分析を批判する際には、その理論的枠組みを十分に理解しておかねばならないこと、そして、相手の理論的枠組みを理解せずに、自分の理論的枠組みのみから相手の分析を批判すると重大な誤りを犯すということを教えてくれている。小泉氏の生成文法批判は、文法はかくあるべし、普遍的言語理論はかくあるべしという、小泉氏の立場からなされたもので、生成文法の基本的な考え方を理解せずになされたものである。¹³ 両氏の間の論争は、学問上の論争をする際に守らなければならない基本的なルール的重要性を教えてくれている。

注

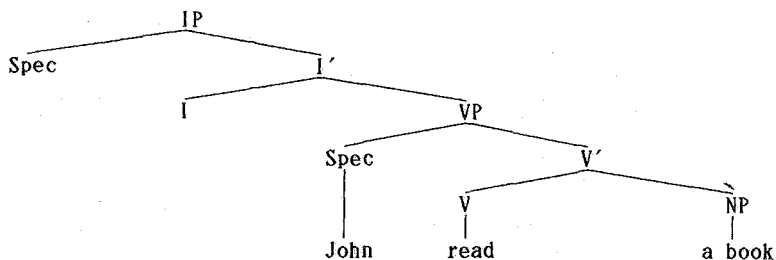
- 1 この特集は次のような構成になっている。
 中島平三、「ことばの階層性を捉える」
 瀬田幸人、「これが〈Xバー理論〉だ」
 竝木崇康、「〈語〉の階層性」
 保坂泰人、「〈言語類型論〉再考」
 外池滋生、「日本語はOVS言語である」
 萩原裕子、「階層性の習得と喪失」
 高見健一、「言語の機能と階層性」
 大庭幸男、「〈Xバー理論〉は不要か」
- 2 かつて、私が小泉氏と日本語の音素/Φ/をめぐって議論した時に（『月刊言語』1979年5月号、7月号、8月号、10月号参照）、小泉氏が「そもそも生成音韻論で用いられる「基底形」はいかなる手順により抽出されるのであろうか？そしてわれわれの言語意識のどの層に属するものであろうか？」と書いておられることから、小泉氏が生成文法に批判的であったことがわかる。
- 3 Spec = Specifier, Comp = Complement
- 4 小泉氏のこの枝分かれ図は正しくない。この構造では、V' = VP となってしまう。正確には、後ほど小泉氏自身が描かれているように、



とすべきである。もし主語が最初から IP の Spec の位置に生成されるのなら、次のようになるし、



動詞句内主語仮説を採用するのなら、次のようになる。



小泉氏は、後者の動詞句内主語仮説の方を紹介されている。

5 保坂泰人, 「〈言語類型論〉再考」, 『月刊言語』1994年3月号, pp. 52-58.

6 Liliane Haegeman, *Introduction to Government and Binding Theory* (2nd ed.; Oxford: Blackwell, 1994), p. 96.

7 日本語の後置詞句に指定部があるかどうかは不明であるので, Spec は省略してある。

8 この Universal Grammar は, 小泉氏のいう普遍的言語理論とは異なるものであ

る。

- 9 抽象的レベルにおける名詞の順序は、第1行為項—第2行為項の順であるようである。
- 10 ちなみに、依存文法では、何故、英語の語順がSVOで（つまり、なぜ第1行為項が動詞の左側へ、第2行為項が動詞の右側へ引き上げられるのか）、日本語の語順がSOVであるのか（つまり、なぜ第1行為項と第2行為項の両方が動詞の左側へ引き上げられるのか）の説明はつかない。生成文法では、headの位置に関するパラメーターによって語順を説明できる。
- 11 Liliane Haegeman, *Introduction to Government and Binding Theory*, pp. 625-72. 本論文で紹介するのは、特に、pp. 649-54である。
- 12 Rizzi (1990a)とは、Luigi Rizzi, *Relativized Minimality* (Cambridge, Mass.: MIT Press, 1990)のことである。
- 13 中島氏は、最初の反論で（9月号, p. 94),

ご批判されている点は、誰もが思い当たるようなものであるだけに、容易に非専門家や初心者の方に誤解を与えてしまうのではないかと心配される。そうした誤解が生じることを恐れて、特集に関与した者として、敢えてご批判に反論を書かせて戴くことにした。

と書いておられるが、まさに、小泉氏は中島氏が恐れている誤解をしてしまったといえよう。